

ところざわの暮らしの今昔

オビトキの晴れ着

11月は七五三のお祝いが行われる月。市内でも、各所の神社で晴れ着姿の親子を目にすることができます。七五三は、子どもの7歳・5歳・3歳を祝う行事ですが、古くは男女とも7歳のみを祝うことが多く、これをオビトキといいました。オビトキ、つまり、帯を解くとはどういうことなのでしょう。

子どもの着物は成長とともに仕立て方が変わり、生まれたばかりの子どもが着る産着は、一つ身といって背縫いのない身幅1尺(約37cm)の着物です。その後、3歳になると三つ身、7歳には四つ身と、身幅はだんだんと広くなり、同時に身丈も長くなって大人の着物に近づいていくのです。一つ身や三つ身には紐が付いており、この紐が帯の役目を果たしますが、四つ身になると紐が取れ、子どもは初めて帯を締めることとなります。そのため7歳のお祝いをオビトキといい、地方によってはヒモトキともいいます。

オビトキには、親元から四つ身の晴れ着が贈られ、子どもはこれを着て神社へお参りをします。昭和初期ごろまでの晴れ着は、男子が黒羽二重の紋付と羽織・袴、女子が色鮮やかな模様を染めた縮緬の振袖でした。

家の跡取りとなる長男のお宮参りでは、その道中に近所のワカイシ(若い衆)が晴れ着姿の長男を肩車に乗せました。肩車から紋付の着物の裾を長く垂らした姿は、勇壮かつ優美なものだったといえます。また、「引きずり餅」といって、道中にワカイシたちが餅を引きずり、数か所で餅を搗いては、見物の人たちに振る舞うこともしたものです。(宮本)



オビトキの晴れ着姿



賑やかな朝陽が魅力の江戸まわし。いきいきとした表情が、沿道の人たちの目をくきつけました。(撮影/市民カメラマン・西山元博)



市制施行55周年記念
ところざわまつり
10月8日出・9日回



楽しい気分が胸を躍るサンパルニバル。ホイッスルの音が消えるとき、祭りの幕も閉じられるのです。(撮影/市民カメラマン・池田敏明)

街の写真館



総勢12基による華麗な山車の曳きまわし。気迫と熱気が燃えあがる曳っかわせ。歴史と伝統のある祭りが盛大に行われました。(撮影/市民カメラマン・松崎 満)

みんなの広場

防災チェック



～防災備蓄倉庫には何があるの?～

市には、指定避難場所が67か所あり、そのうちの62か所に防災備蓄倉庫を設置しています。
子ども：お父さん、防災備蓄倉庫には何があるか知っている?
お父さん：もちろん!この前、防災訓練に参加したからね。倉庫には、アルファ米という保存ができるお米や、クラッカー等の食料があるんだよ。
子ども：食べ物だけ?
お父さん：それから…、組み立て式のトイレや照明器、毛布、リヤカー、タンカ、スコップ等が入っていたね。
子ども：へー!いろいろなものがあるんだね。

どんなときに使うの?
お父さん：地震などで家が壊れて、住む所がなくなった人たちが、避難して共同生活をするときを使うんだよ。
子ども：テレビで観たことあるよ!
お父さん：防災備蓄倉庫には、生活に必要な物が全部入っているわけではないんだ。必要な物は、家の中に準備しておくことが大切だよ。
子ども：うん。いざというときのために僕の大切な物をリュックに入れておこう!
問い合わせ 危機管理課(☎2998-9399・FAX2998-9042)

はっぴーとこ 野老 子

～身近な自然を描き続けて～

北田 稔さん(弥生町在住)



『時には、心が和む絵を眺めてみませんか』。白を基調にした北田さんの絵は、生き物たちが持つ雰囲気や大事にしつつ、やさしいタッチで描かれています。

小学生のころから絵を描くことが好きだった北田さんは、アニメの専門学校を卒業後、アニメスタジオへ就職。その後デザイン会社へ転職し、イラストの仕事に携わったことがきっかけで、イラストレーターとして独立しました。北田さんの絵は、1つのものを描くのではなく、さまざまなものを組み合わせたもので、「1枚1枚じっくり描くイラストが、自分には向いている」と感じ、この道を選んだのです。

そんな北田さんは、念願の絵本『ぼたらの木のものがたり パムとボム』を出版。2匹のリスがぼたらの木を冒険するお話です。シナリオライターにイメージを伝え、できあがった物語に連続した絵を描いていく。この工程を「初めてのようで難しかった」と語りますが、絵本は、ご本人の雰囲気や生活に似て、ほのほのとした感じで描かれています。



赤ちゃん 8月初め、義姉から「匠に赤ちゃんが産まれたのよ」と電話があった。義姉は孫の誕生に声が上がっていた。私は、母子ともに落ち着いた9月の下旬に赤ちゃんを見に行っ。玄関先で義姉の手を抱かれた赤ちゃんはまるまる太り、珍客を迎える瞳を覗いて、私は壊れものに触れるような心地で、一切を委ねている律儀な命の塊を抱いて、久しぶりに心の高まりを覚えた。母親代わりの義姉を振り返って目で追っている様子が、そのうち、お腹がすいた感じ。口をパクパクして、全身で大きな声で泣き、乳を催促する。哺乳瓶の乳首を口に含み、「フクン、ウクン」と力いっぱい、そして満足げに飲み干すと、義姉に身を委ねて心地よく眠る。「命とは、なんて素晴らしい恵みなのだろう!」

身近な自然... 土松 西村 ヒサ子 中秋の名月の写真を撮ろうとしようとになりました。もう深夜11時。ちよと泊まりに来ていた孫たちと一緒に、外に出ました。真っ暗な夜空にくっきりと浮かぶ神秘的な満月。本当に感動しました。これほどゆつたりとした気分、月を眺めるのは何年ぶりだろう。バジャマ姿ではしゃぐ孫たちの声も心地よく、しばらく夜空を仰ぎ、身近なところにも大きな感動があることに、なんだかうれしくなりました。「今夜のお月様、写真は失敗したようですが、よい思い出として、心にはほっきりの写っていますよ!」

とこ とこ 町内会めぐり

【三ヶ島地区・第5区自治会】 ～靴谷八幡湿地の棚田の復元～

狭山丘陵の北西部の入間市と所沢市にまたがった約85ヘクタールの広大なスペースに、雑木林や湿地等の自然そのものを展示物とした「県立さいたま緑の森博物館」があります。博物館の所沢市部分の約20ヘクタールは、ふるさとの景観を学ぶエリアとして、現在整備が進められています。この狭山丘陵には、希少な植物のミヤマシラスゲや絶滅危惧種のカヤネズミが生息しています。

こうした自然に恵まれた一角に、三ヶ島第5区自治会があります。自治会がある靴谷地域では、「心のふるさと靴谷八幡湿地保存会」が発足し、靴谷八幡湿地の棚田の復元作業が行われ、美しい水田風景がよみがえるとともに、蛭やトンボ、蛙等も生息し、自然を満喫できるようになりました。6月には、ヘイケボタルが飛び交い、幻想的な光が大きな感動を与えてくれました。

この棚田では、自治会の会員も参加する保存会や地元の小中学生等による田植え作業が行われ、11月には収穫祭も予定しています。

また、棚田の近くには八幡神社があり、境内には山の杉の葉で作られた愛くるしいトコロチャンと呼ばれるマスコットや、大木を彫った1対のフクロウが人々の心を癒してくれます。



田植え作業の様子

豊かな環境が残る第5区自治会では、地域の方々が棚田の復元を通して、食文化を見直し、協力して働くことの大切さを再認識しました。

今回のテーマは「初めての体験」です

▶「誰でもエッセイ」ではテーマにそった投稿を募集 ▶はがきに300字以内 ▶文章は添削あり ▶掲載者には記念品を進呈 ▶次回のテーマは「初めての体験」 ▶締め切りは11月8日必着 ▶先着順 ▶〒359-8501・並木1-1-1 所沢市役所秘書広報課「みんなの広場」係 ☎Eメール(アドレスa9024@city.tokorozawa.saitama.jp) 可。

誰でてもイ

これから大変だけど... 下富 岸田 雅代

4年前に父が他界してから、気丈に心とり暮らしをしてきた85歳の母が、今年の暮るから弱音を吐くようになりまし。そのため我が家に行く回数が増えたことや、忙しすぎることもあって、9月のある日、ささいなことで口げんかを繰り返して帰ってきたのです。

それから数日後、母は体調が悪くなり緊急入院してしまいました。意識がなく話しかけても反応はなく、た目を見張っているだけ。「このままでもないことになったら、一生悔やまれる...」。

入院して10日目。いつものように病院をあとにするとき、私は、「まあちゃんよ、また、来るからネ」と言いました。すると、母は、「こころ笑って大きくなすういたです。私は、涙が止まりませんでした。」

心豊かな人たち 金山町・黒田 義正

秋の日さしの中、自転車で私を追い越して行った若い女性が、狭い踏切の手前で立ち止まっていました。「止めたのかな」と見ると、反対側から手押し車に老婦を乗せた同輩の女性が渡り始めている。すれ違いできそうだが、待ってあげているらしい。

渡り終えるとき、待っている人に気づいた老婦は丁寧に頭を下げた。押していた女性は、「ありがとうございます」と待っていた女性も、「どうぞお大事に」と声を掛け合い、「ごやかに別れた。ゆずり合い、かはい合う心の風景に触れた私は、ほのほとした温かさに感動しました。」

テーマ 最近、感動したこと

